九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

青年期における自他への攻撃性と自己愛傾向の関連

山崎, 俊輔
九州大学大学院人間環境学府 : 実践臨床心理学専攻 : 院生

https://doi.org/10.15017/12408

出版情報：九州大学心理学研究. 9, pp.143-151, 2008-08-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

青年期における自他への攻撃性と自己愛傾向の関連

山崎俊輔

（九州大学大学院人間環境学府）

本研究の目的は，青年期における自他への攻撃性の相違を明確にし，自己愛傾向との関連を検討することであった。第Ⅰ研究では大学生 45 名を対象として，自由記述の質問紙を施行し，自他への攻撃性における様相の違いを明らかにした。第Ⅱ研究では，自他への攻撃性と自己愛傾向との関連を詳細に検討するため，大学生 328 名を対象として自他への攻撃性質問紙と小塩(1998a)の自己愛人格目録短縮版(NPI-S)を用いた質問紙調査を行った。得られたデータを自己愛傾向得点(NPI-S 得点)によって 4 群(過敏型・自己愛傾向 High/Low 群，無関心型・自己愛傾向 High/Low 群)に分け，攻撃性得点を従属変数として分散分析を行った。その結果，過敏型自己愛傾向は，自身への攻撃性である「自責感」や「刺激欲求」に影響していることが示された。一方，無関心型自己愛傾向は，自己主張が強く他人のことは気にかけないといった他者への攻撃性である「積極的行動」に大きく影響していることが示された。つまり自他への攻撃性には自己愛傾向が大きく関連しているといえる。

キー・ワード：自他への攻撃性，過敏型自己愛傾向，無関心型自己愛傾向

Ⅰ　問題と目的

１．攻撃性について

攻撃性に関する研究は，臨床心理学をはじめ，他分野の心理学，人類学，生物学，動物行動学などで行われている。しかし，研究分野によって攻撃性の捉え方の幅は広い(安立,2001)。このことは，山口ら(1988)が指摘しているように，攻撃性について考える上で多面的に考えることが出来る反面，攻撃性がどのようなものであるのか，といったことについての考え方を混乱させる原因にもなっている。攻撃性はどの年代・世代にも見られるものであるが，青少年の攻撃性は，マスメディアの報道などを通して注目を浴び，見聞きすることが多くなった。それらは，普段おとなしかったりまじめだとされていた，いわゆる「よい子」であった青少年が突然，イライラしていたといった理由で他者に暴力を振うものや，些細な理由によってまったく関係のない第三者を巻き込むもの，計画的に行われるものなど様々である。そして，その理解・対応は難しい。こうしたことから，青少年の持つ攻撃性・攻撃行動への理解・対応がより重要になってきていると考えられる。

一般的には攻撃性とは，“他者に危害を加えようとする意図的行動”（大淵,1993)であり，“他の生活体に対して有害な刺激を与えること”（秦,1998)であるというのが，広く認められる概念であろう。しかし，攻撃性の概念，定義にはさまざまな考え方がある。

安立(2001)によると，心理臨床の領域においては，まず“心のエネルギーであり生きるための建設的で能動的な力であり，自己を維持する自我機能の一部”なのだとする捉え方がある。そして，“誰の心にも存在する破壊性を持った自然な心性であり，一見否定的な側面であっても，内的な個性化を実現するためには必要な力である”，とする考え方がある。また安立（2001）は，“能動的に，自己主張的行動につながり外界との適応を助け，自尊心の基礎になるもの”であるともしており，攻撃性にはネガティブな側面とポジティブな側面がある事を指摘している。山口ら(1988)も，“①激しい自己主張行動，②自分の所有にしてしまう行為，③敵意，対抗，破壊などといった人を害する行為，④統制，支配，管理の行動”でありどのような攻撃行動も，ネガティブな側面とポジティブな側面を持つとしている。

また攻撃性が向けられる方向・対象は，他者や物といった外界の対象ばかりでなく，自分自身にも向けられる(松木,1996)。自責感や抑うつ感に加え，思い描く理想とのズレや自分自身の至らなさ，ふがいなさを感じることで生じる自己不全感や自己否定感，自己嫌悪などといった感情が中核となって，自身のその内側に向けられることがある。それが過食や自傷行為，過度のアルコール摂取や喫煙といった，自己破壊的な攻撃行動となって表出されたりすることも考えられる。攻撃行動はこのように，他者や物に対する暴力的な行動や言動ばかりでなく，自己破壊的な行為も含む。

安立(2001)は攻撃性について，①自己主張・適応行動などの能動性，②自己攻撃性(内包傾向)，③自己攻撃性(表出傾向)，④対象攻撃性(内包傾向)，⑤対象攻撃性(表出傾向)の 5 要素から成るというモデルを提示している。そこで本研究では安立のモデルを参考に，攻撃性を「自他に方向付けられる，破壊的

※本論文は、「九州大学心理学研究」9巻（2008年8月）に投稿した論文を、九州地区国立大学間の連携に係るリポジトリ編集委員会による査読結果報告書に従って加筆修正し、「研究論文集：教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集」vol.2(1)に掲載されたものである。

でネガティブな側面と，建設的・能動的に自己に関わるポジティブな側面の 2 面性を持つ，誰もが持っている必要な心的エネルギーであり，ときに攻撃行動として表出されることがあるもの」と定義する。

攻撃性は誰もが持つ心のエネルギーであり，自己主張や適応の一端を担うといった重要かつポジティブな面を持つ。一方，暴力的・破壊的であるというネガティブな面をも併せ持っているものである。しかし個人によって，ポジティブな面を発揮したり，より他人や物といった対象に向けて表出したり，またはより自分に向けたり表出したりといった傾向が見られると考えられる。それらの傾向の違いが，心理的な特徴によるものなのかということについての研究は見られない。攻撃性を自身にも方向付けられるものとして扱った研究もまだ少ない。攻撃性への理解と対応が関心を集めている今日，この問題について探索していくことは，青年期における攻撃性の本質の一端を捉えることに繋がり，有意義かつ重要であると考えられる。

2. 自己愛傾向について

今日，事件を起こしてしまった青少年や，またそうでない一般の青少年にも，自己の希薄さや脆弱さが見られるという指摘がなされている(湯川,2003)。それは“空虚な自己”(景山,1999)といった言葉でも表現されている。青少年における自己に関する問題は，近年注目されている問題の１つである。そしてこのような，自己が傷つきやすく脆弱であるという特徴を持った，現象的な表象形態の１つとして考えられているのが自己愛である。特に青年期は自己愛的な傾向が他の時期よりも高まると言われ，自己愛傾向は青年期特有の人格的特徴の１つ(小塩,1998b)とされる。自己愛についての従来的な研究では，自己愛的な性格の特徴として誇大性や自己顕示性，他者への無関心さなどを挙げ，それらを中心に取り扱ったものが多かった。また，わがままで攻撃的であるという特徴も持っていることから，青年期における他者に対する攻撃性との関連に焦点をあてた研究もいくつか見られる。それらでは，このような自己愛傾向と他者への攻撃性には関連性があり，自己愛傾向が攻撃性に影響を与えているのではないかということが示されている(中川,2002;湯川,2003 など)。近年はまた，Gabbard(1989,1994/1997)によって，自己愛には「他人をまったく気にかけない無関心型」と「他人を過剰に気にかける過敏型」という 2 つのタイプがあることが指摘され，関心が高まっている。前者は従来研究されてきた傾向である。後者の傾向は，他人の評価に過敏に反応し，自己評価が低くて内気で傷つきやすいという特徴を示すとされる。小塩（2004）は，自己愛人格目録短縮版(NPI-S)(小塩,1998a)を用いて主成分分析を行った。そこでは，第 1 主成分が全体的な自己愛傾向の高低，第 2 主成分が自己主張性―注目賞賛欲求因子で，第 2 主成分において自己主張性が優位であれば無関心型，注目賞賛欲求が優位であれば過敏型にあたるとする，自己愛傾向の 2 成分モデルを見出している。

3. 攻撃性と自己愛傾向の関連について

これら 2 つのタイプの自己愛傾向のうち，過敏型は無関心型に比べて日本人の間に多く見られるタイプだと考えられ，福井(2001)が指摘するように，対人恐怖などとの関連で論じられるなど過敏型についての研究は盛んになってきている。しかし，その心理的特徴をとらえた研究はまだまだ少ない。過敏型の自己愛傾向にある人は，おとなしく控えめで，自己主張が少なく常に周囲に気兼ねをする「よい子」であることが窺える。そのため，中川(2002)が指摘するような，自己愛傾向が強いほど攻撃性も強いという，無関心型にみられるような攻撃性との関連はあまりないように思える。しかし過敏型においても，他者に攻撃性が向けられているが，その特徴から自身に内包されて表出は抑制されている可能性や，外に向かわず自分自身に向けられており傍目からはわからないという可能性が考えられる。自分に向けられた攻撃性についての研究では，摂食障害や自傷行為など重篤なものを中心に，疾病によるものとして扱っているものや，それらの行為の特徴的な行動傾向をそれぞれ尺度として標準化し，それらと攻撃性または自己愛との関連を扱ったものは散見される。しかし自己愛傾向との関連という視点から，重篤なものではなく，健常群においても見受けられるような自分自身に向けられた攻撃性と，そこから表出した自己攻撃的な行為とを包括的に扱った研究はほとんどない。青年期における攻撃性と自己愛傾向の関連性を検討し，それらの関連を探索することは，青年期の心理を捉える上で有意義であると考えられる。

4. 本研究の目的

以上のようなことを踏まえ，本研究の第 1 の目的は，青年期における自他に向けられた攻撃性の様相の違いを明らかにすることである。第 2 の目的は，攻撃性の様相の違いを生じさせる要因について，青年期特有の心性である自己愛傾向との関連という視点から，詳細に比較・検討することである。

Ⅱ　第Ⅰ研究

1. 目的：青年期における自他に向けられた攻撃性の様相の違いを明らかにする。

2. 方法

(1) 調査期間：2006 年 7 月

(2) 調査対象：Ａ県内の大学生 45 名(男性 14 名，女性 31 名)。平均年齢 21.65 歳(*SD*=1.06)。

(3)調査内容：他人と自分自身のそれぞれを対象とし，イメージ･アップのために①攻撃性が引き起こされる時・場面を尋ね，②そのときどのように振舞うか，またはどう振舞いたくなるかということについて，それぞれ自由記述で回答を求めた。

(4)データの処理：筆者と心理学を専攻する大学院生 5 名によりKJ 法を用いた。

3. 結果と考察

(1)他者に対して向けられる攻撃性について

他者に対して攻撃性が引き起こされる場面は主に，「自己中心的な人」「相手の能力不足」「マナーに欠ける人」など，自分の思うような関係を築くことが出来ないと感じられるときや，相手に嫌悪感を覚えるときというような場面であった。これらのような場面のときに，どのように振舞うか，また振舞いたくなるかという項目についてＫＪ法を用いて分類したところ，11 のカテゴリーが得られた。それらは，「積極的に怒りを伝える」「他人に愚痴を言う」「物に当たる」「あきらめる」「苛立ちを態度で示す」「何もしない」「我慢する」「飲食」「気分転換」「回避」「分類不能」の 11 カテゴリーである。

これらの中でも，最もその内容が豊富で分類された回答数が多かったのが「積極的に怒りを伝える」である。中心的に見られたこの振る舞いは，直接相手に自分の怒りを伝える・ぶつけるという攻撃行動である。他者に向けて直接に表出される攻撃性には身体的攻撃と言語的攻撃とがあるが，江崎(2001)が示しているように，日常場面においては主に言語的攻撃が行われているということがここでは示された。

また，「苛立ちを態度で示す」や「我慢する」といったカテゴリーからは，攻撃性を直接的に表出するのではなく，自身の中に抑えこみ，強い否定的な感情として内包することでその場をやり過ごすという，他者への攻撃性の特徴的な在り方が示されていると考えられる。

(2)自分に向けられる攻撃性について

一方，自分自身に対して攻撃性が向けられる場面はその内容の内訳から，主に「物事がうまくいかないとき」「自分の能力に限界を感じたとき」のような，自分自身のふがいなさや情けなさに直面したとき，また「他人に対して配慮に欠けるとき」「自分勝手だと気づいたとき」といった，他人への行動がふさわしいものでないと感じたときであることが明らかになった。このような場面においてどのように振る舞うか，どのように振る舞いたくなるかという項目に関しては，ＫＪ法を用いて分類した結果，10 のカテゴリーが得られた。それらは，「他人に愚痴を言う」「自分に罰を与える」「自己嫌悪」「八つ当たりする」「泣く」「飲食」「気分転換」「諦める」「何もしない」「前向きになる」である。「自分に罰を与える」や「死にたくなる」「悩む」「落ち込む」といったネガティブな側面では，松木(1996)が述べているような，自分の思うように振る舞ったり，思うように物事を遂行する能力が十分に備わってないと感じられることから生じる自己嫌悪や自己否定感，または自責感といったものが窺える。それらの感情が中心となって攻撃性として内向することが，ここでの攻撃性を特徴づけていると考えられる。また占部(2002)は，内化された攻撃性は身体的攻撃として表出されることである程度までは，自分に覆いかぶさっている自責感や自己嫌悪を発散させ，自己を解放させると指摘している。そうすることで，内化された攻撃性は，自己の実存を回復する原動力としての働きを担っているのではないかと考えられる。

(3)まとめ

他者への攻撃性は，主に言語的攻撃として直接的・間接的に表出されることが多く，内包される場合も強い否定的感情を伴っていることが明らかになった。ここでは，相手への横柄さや傲慢さ，相手の行動の理由に対する無関心さが現れていると推察された。一方で自分へ向けられた攻撃性は，主に自責感や自己否定感などを中核として内向し，時に自己攻撃行動として表出されることが明らかになった。これにより，自我の脆弱さや傷つきやすさ，他者からの評価に対して敏感になっていることが推察された。これらの特徴は，安立(2001)が提示している攻撃性のモデルに当てはまり，自己愛の特徴として挙げられているものとも重る。また無関心型自己愛傾向と，他者への攻撃性との関連を検討した小塩(2002)や湯川(2003)の知見と一致していることから，自己愛傾向が，自他への攻撃性の様相の違いを生じさせる要因の１つとなっていると推察された。

Ⅲ　第Ⅱ研究

1. 目的：攻撃性の様相の違いを生じさせる要因について，青年期特有の心性である自己愛傾向との関連という視点から，詳細に比較・検討する。

2. 方法

(1)調査期間：2006 年 10 月下旬～11 月上旬。

(2)調査対象：Ａ県内の大学生 356 名のうち無効な

回答が見られた 26 名を除いた，328 名(男性 139 名，女性 189 名)。平均年齢 20.20 歳(*SD*=1.69)。有効回答率 92.13%。

(3)調査内容：

1)自他への攻撃性質問紙

33 項目，6 件法からなる攻撃性質問紙(安立,2001)を用いた。「対象攻撃」「積極的行動」「自己破壊的行動」「自責感」「猜疑心」の 5 つの下位尺度から成る攻撃性質問紙の使用にあたって，「自己破壊的行動」「猜疑心」因子にやや曖昧で分かりにくいと考えられる項目がみられた。そのため，日常的でより具体的な項目をいくつか加える必要があると思われた。そこで，第Ⅰ研究の結果から 4 項目を作成した。更に自傷尺度(角丸,2004)，状態―特性怒り表出目録(STAXI)日本語版(鈴木ら,1994)や山口ら(1988)の攻撃性質問票より抜粋した 3 項目を加え，40 項目としたものを使用した。安立の攻撃性質問紙との区別が明確になるよう，名称を自他への攻撃性質問紙とした。

2)自己愛人格目録短縮版(NPI-S)

小塩（1998a）が作成したものを使用。30 項目，5 件法。「注目・賞賛欲求」「優越感」「自己主張性」の 3 つの下位尺度から成る。

（4）データの処理：①自他への攻撃性質問紙については因子分析，②自他への攻撃性質問紙と NPI-S の関連については 1 要因分散分析。

3. 結果

(1)自他への攻撃性質問紙について

自他への攻撃性質問紙について，因子分析を行った。因子の抽出には(重み付けのない)最小二乗法を用いた。因子数は，固有値 1 以上の基準を設け，共通性を考慮して 6 因子としてプロマックス回転を行った。最終的に得られた因子パターンを Table1 に示した。その結果，安立(2001)の攻撃性質問紙よりも 1 因子多い構造となった。各項目内容と攻撃性質問紙の因子構造とを比較し，第 5 因子まではほとんど同内容であることから，第 1 因子は「対象攻撃行動」因子(α＝.86)，第 2 因子は「積極的行動」因子(α＝.86)，第 3 因子は「自責感」因子(α＝.84)，第 4 因子は「自己攻撃行動」因子(α＝.84)，第 5 因子は「猜疑心」因子(α＝.85)とした。第 6 因子は項目内容より「刺激欲求」因子(α＝.71)とした。

(2)自他への攻撃性質問紙と NPI-S の関連について

小塩(2004)の 2 成分モデルを基に，NPI-S の注目・賞賛欲求得点平均と自己主張性得点平均を比較し，被験者を自己主張性よりも注目・賞賛欲求の方が優位な「過敏型・自己愛 High/Low 群」(H 群：47 名，L 群 41 名)，注目・賞賛欲求より自己主張の方が優位な「無関心型・自己愛 High/Low 群」(H 群：21 名，L 群 34 名) の 4 群に分けた。これを独立変数とし，自他への攻撃性質問紙の合計得点及び下位因子得点平均を従属変数とした 1 要因分散分析を行った(n=143)ところ，下記の結果が得られた。

Table1 攻撃性質問紙の因子構造 (*n* =328)

項目		
対象攻撃因子	**(8 項目、α= .86)**	
	4．特定の誰かが気に入らなくて、反抗的な態度を取りたくなる時がある。	
	5．腹の立つことをされると、にらみつけてやりたくなる。	等
積極的行動因子	**(6 項目、α = .86)**	
	12．何事にも恐れず立ち向かってゆく方である。	
	9．自分のやりたいことに向かって突き進んでゆく方である。	等
自責感因子	**(7 項目、α =.84)**	
	19．何かにつけ、心が傷つくことが多い。	
	20．他人とのトラブルがあると、自分を責める方である。	等
自己攻撃因子	**(6 項目、α = .84)**	
	29．自分の皮膚をかきむしりたくなることがある。	
	28．自分の髪を引っ張ったり、引き抜いたりしたくなることがある。	等
猜疑心因子	**(4 項目、α =.85)**	
	36．他人のことを心から信用することはできない。	
	38．他人に対して、疑い深いところがある。	等
刺激欲求因子	**(3 項目、α =.71)**	
	16．平凡に暮らすより何か変わったことがしてみたい。	
	14．いつも何か刺激を求める。	
	17．色々な世間の活動がしてみたい。	

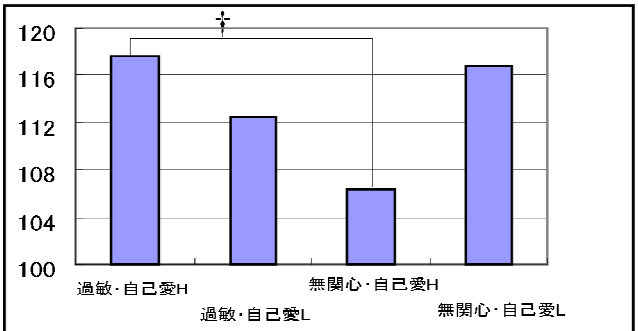

Figure1　自他への攻撃性質問紙合計得点平均

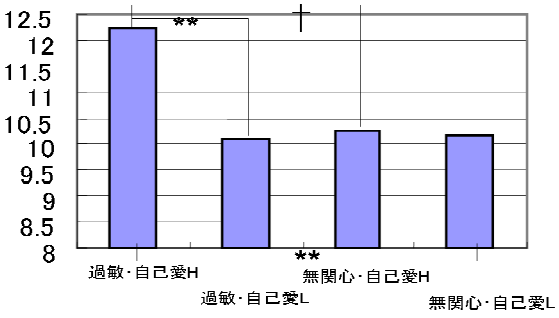

Figure5 「刺激欲求 」因子得点平均

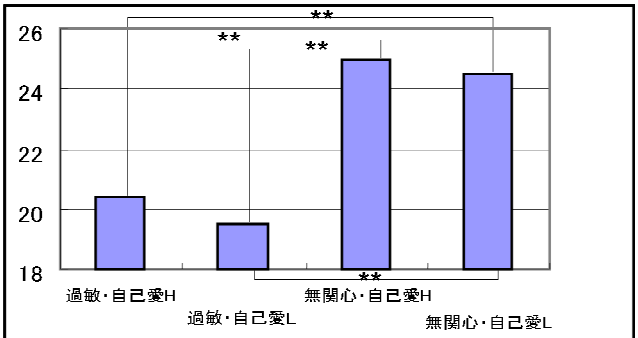

Figure2 「積極的行動」因子得点平均

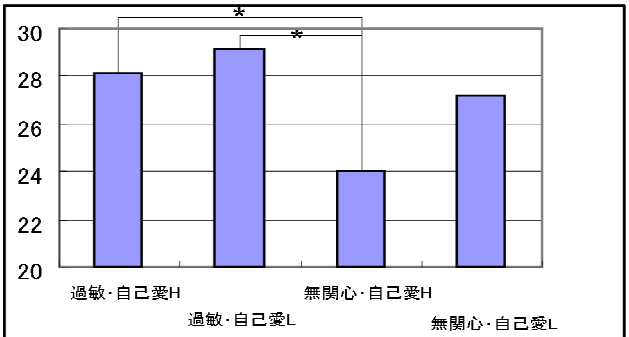

Figure3 「自責感」因子得点平均

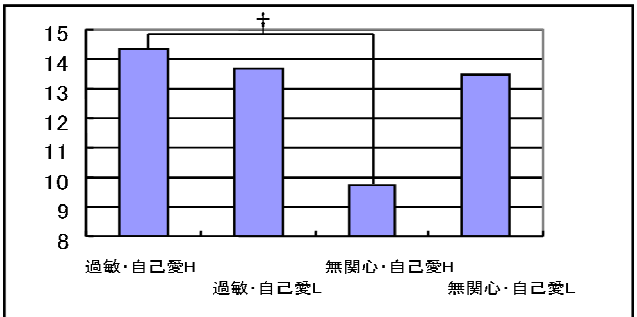

Figure4 「自己攻撃行動」因子得点平均

1)自他への攻撃性質問紙合計得点と NPI-S の関連について

群の主効果に有意傾向がみられた($F_{(3,139)}$=2.54,p<.10)。Tukey の HSD 法による多重比較の結果，過敏型・自己愛 H 群は無関心型・自己愛 H 群より高いという傾向がみられた(MSe=282.66,p<.10)。以上の結果を示したのが Figure1 である。

2)自他への攻撃性質問紙の各下位因子と NPI-S の関連について

ⅰ)「対象攻撃」因子

有意な差は見られなかった($F_{(3,139)}$=1.75, $n.s$)。

ⅱ)「積極的行動」因子

群の主効果が有意であった($F_{(3,139)}$=14.50, p<.01)。Tukey の HSD 法による多重比較の結果，無関心型・自己愛 H/L 群はともに過敏型・自己愛 H/L 群より有意に高かった(MSe=17.48, p<.01)。無関心型・自己愛 H/L 群ともに過敏型・自己愛 H/L 群よりも有意に高いということから，無関心型の人は自己愛の高低に関わらず，過敏型の人よりも積極的な行動を行うということが明らかになった。以上の結果を示したのが Figure2 である。

ⅲ)「自責感」因子

群の主効果が有意であった($F_{(3,139)}$=3.74, p<.05)。Tukey の HSD 法による多重比較の結果，過敏型・自己愛 H 群および L 群はともに無関心型・自己愛 H 群より有意に高かった(MSe=33.86, p<.05)。このことから，過敏型の自己愛傾向にある人は自己愛全体の高さに関わらず，無関心型で自己愛が高い人よりも自責感が強く，自分を責めやすいということが明らかになった。以上の結果を示したのが Figure3 である。

ⅳ)「自己攻撃行動」因子

群の主効果に有意傾向が見られた($F_{(3,139)}$=2.36, p<.10)。多重比較の結果，過敏型・自己愛 H 群の平均が無関心型・自己愛 H 群の平均よりも高い傾向が

見られた(MSe=68.81,p<.10)。このことから，過敏型で自己愛が高い人は無関心型で自己愛が高い人よりも，自分に対して身体的に何らかの攻撃を加える傾向があるということが示された。以上の結果を示したのがFigure4である。

ⅴ)「猜疑心」因子

有意差は見られなかった($F_{(3,139)}$=.549, $n.s$)。他者に向けて内包される攻撃性と自己愛傾向には関連がないということが示された。

ⅵ)「刺激欲求」因子

群の主効果が有意であった($F_{(3,139)}$=5.31, p<.01)。TukeyのHSD法による多重比較の結果，過敏型・自己愛H群は過敏型・自己愛L群および無関心型・自己愛L群より有意に高かった(MSe=8.57, p<.01)。また，過敏型・自己愛H群は無関心型・自己愛H群よりも高い傾向が見られた。以上の結果がFigure5である。

4. 考察

(1)自他への攻撃性質問紙について

今回，安立(2001)の攻撃性質問紙に7項目を加えて作成した40項目からなる自他への攻撃性質問紙は，因子分析によって最終的に34項目になった。除かれた6項目には元からの項目も含まれていたが，それらは個人の嗜好や趣向，捉え方の問題が大きく関わる項目であり，攻撃性としての一般性をもっていなかったのだと考えられる。

また因子構造は6因子構造となった。第6因子としてまとまって現れた項目群はその内容から，現在の状況や環境への欲求不満が，積極的ではないが，そこから抜け出すきっかけとなり得る，外部からの何らかの刺激を欲するという形で自分への攻撃性に転化されていると思われた。そこで，第6因子を「刺激欲求」因子と命名した。

(2)自他への攻撃性質問紙とNPI-Sの関連について

1)1要因分散分析の結果について

①自他への攻撃性質問紙合計得点とNPI-Sの関連について

分析の結果，過敏型で自己愛が全体的に高い人は，無関心型で自己愛が全体的に高い人よりも強い攻撃性を持つ可能性が考えられた。これより，自己愛傾向とそのタイプの違いが，攻撃性に関連していることが示された。

②自他への攻撃性質問紙の各下位因子とNPI-Sの関連について

ⅰ)「対象攻撃」因子

「対象攻撃」因子は，「特定の誰かが気に入らなくて，反抗的な態度を取りたくなる時がある」や「腹の立つ相手には，いやみとか皮肉を言ってやりたくなる」といった，他者への攻撃性の表出を表す項目で構成されている。中川(2002)らの研究では，無関心型と表出される他者への攻撃性は関連があり，自己愛傾向が高いほどその攻撃性も高いという結果が得られている。しかし今回の研究では，自己愛傾向と「対象攻撃」因子との間に有意な関連はみられなかった。無関心型は，攻撃性の中でも言語的攻撃に影響していることが指摘されている(小塩,2002；中川,2002 など)。無関心型の主要な要素であるその自己主張性の強さ，自己中心さ，傲慢さ，言語的攻撃に影響を与えていると推察される。今回用いた自他への攻撃性質問紙では，「対象攻撃」因子が身体的攻撃，言語的攻撃，他者への否定的態度や否定的信念の表出等を厳密に分けた項目のまとまりで構成されておらず，複数の要素が混在しているために有意な差を見出すことが出来なかったと推察される。

ⅱ)「積極的行動」因子

この因子は，「何事にも恐れず立ち向かってゆく方である」「正しいと思うことは人に構わず実行する」といった項目で構成された，他者の目や意見をあまり気にせず，自分の考え，やり方で，自分が一番納得できるように物事に取り組むといった様子が窺える因子である。分析の結果より，Gabbard(1994/1997)や小塩(2004 など)らが指摘する無関心型の特徴・傾向を表しているものと捉えることが出来る。過敏型の，内気で抑制的で他の人々の反応に敏感であるという特徴も，無関心型の方が有意に高かったことを説明するものと考えられる。またこの因子は，攻撃性のポジティブな面を表しているものでもある。能動的，建設的に表出することで攻撃性を自分にとって適切な形で発散させていると考えられ，当因子は無関心型に即したポジティブな面をもった下位因子であると考えられる。

ⅲ)「自責感」因子

分析の結果から，過敏型自己愛傾向では，社会的な立場，周囲の他者の視点から自分の行動・感情や自分の生活の様子などを捉え，ふさわしいものにしようとする姿勢がうかがえた。それは，「他人が不快そうにしていると，自分が悪かったのではないかと思う」や「他人とのトラブルがあると，自分を責める方である」といった項目が高い因子負荷量を示したことに表れている。そのために，自分を他者の視点から見てふさわしくないと感じられた場合には，自己否定的な感情に支配され，自責感や抑うつ感，自己嫌悪が攻撃性の中核となって自分に内向するのだと思われる。また，抑制的で内気という過敏型の特徴も，物や他人に八つ当たりするといった攻撃行動

を抑制させ，内化させる働きをしていると考えられる。これらのことから過敏型においては，畑田(2001)が指摘しているように，攻撃性を内在化させていることで傍目には適応的な「よい子」に映るが，内的には情緒不安定な状態に陥っているのではないかと推測される。

ⅳ)「自己攻撃行動」因子

分析結果より，過敏型で自己愛が高い人は無関心型で自己愛が高い人よりも，自分に対して身体的に何らかの攻撃を加える傾向があるということが示された。この因子は，「自責感」因子とともに自分への攻撃性を構成する因子であるが，自責感がある段階まで高じたときに生じる攻撃行動が自己攻撃行動であると考えられる。占部 (2002)は自己攻撃行動について全般的に，そうすることで内向する攻撃性から自己を解放するという意味合いもあるとしている。つまり，自己攻撃行動は内向する攻撃性から自己を守るために取られる手段でもあり，罰としての手段でもあると言える。前後者ともに，過敏型の大きな特徴の一つである他者志向性(小塩,2002)と，それによって生じる自己不全感や他者からの肯定的な評価への意識が影響していると考えられる。また過敏型の主要な要素である，他者からの注目を集めたいという欲求を満たそうとする気持ちも働くために，そういった行動を起こすということも推察される。

ⅴ)「猜疑心」因子

「猜疑心」因子は，「他人のことを心から信用することは出来ない」「周りの人が敵に見えることがある」といった，内心に抱く敵意を表す認知的な項目からなっており，内包される他者への攻撃性を示している。しかし有意な差がみられなかったことより，無関心型においてはその特徴から，認知的な側面よりも，攻撃性の直接的行動的な側面に自然と向かうことが推測できる。過敏型においては，他者の態度・振舞への疑念や不信を，自分に何らかの不適切な行いや信念があったのではないかというように自らへ攻撃性を向けてしまうのではないかと考えられる。一般に自己愛の裏には，他者から容易に傷つけられる脆弱な自己が隠されており，その脆弱な自己を防衛するために自己愛が発達する。このことから，他者への猜疑心は脆弱な自己を防衛する上で欠かせない要素であると考えられる。今回有意な差がみられなかった理由は，次のように推察される。猜疑心は自己を防衛する上で重要な要素として誰にも存在しており，自己愛傾向以外の認知的側面や社会･文化的側面といった要素が，そこに相互に複雑に絡みあうことで何らかの影響を与えているため，今回有意差はみられなかったのだと考えられる。

ⅵ)「刺激欲求」因子

分析の結果，過敏型で自己愛が高い人は，同じ過敏型でも自己愛が低い人，また無関心型自己愛傾向の人よりも，現在の自分の状況・環境を離れるきっかけとなる，何らかの刺激を求める傾向が強いことが明らかになった。項目内容の「平凡に暮らすより変わったことがしてみたい」「いつも何か刺激を求める」「いろいろな世間の活動がしてみたい」は，安立の攻撃性質問紙では「積極的行動」因子の中に入っていた。この 3 項目が「刺激欲求」因子として独立して現れた理由を，以下に考察する。

過敏型は周囲の他者の評価や他者の反応を過剰に気にかけ，周囲の期待に沿うように行動し，常に周囲に気兼ねをするといった特徴を示す。しかしそれは外的に示された特徴である。NPI-S の注目･賞賛欲求因子優位が過敏型に相当するとされるように，内的には他者の注目を集め，肯定的に受容され評価されたいという願望を持っている(小塩,2004 など)。だが自己の脆弱さ,傷つきやすさを防衛するためには，上述の様な「よい子」でいるしかないのだと推測される。そして，他者から賞賛され評価されるということを意識しにくいため，本来持っているそうした注目・賞賛欲求は，満たされないまま鬱積していくものと推察される。そうした欲求不満は，過敏型であることから外には向けられず，「よい子」でいてしまうような状況や環境を抜け出すきっかけとなりそうな，何らかの刺激を求めるという形で自身への攻撃性に転化されていることが窺える。これは，そうした環境や状況を離れ，新しい環境の中で欲求が満たされることを期待するということの表れでもあり，この因子は自分への攻撃性におけるポジティブな側面であると考えられる。これは，直接的に環境や社会的状況に働きかけていく無関心型にはみられない傾向である為に,独立して現れたのだと考えられる。

2)まとめ

以上により，自他への攻撃性の様相の違いを生じさせている要因の 1 つに，自己愛傾向それぞれのタイプの特徴があるということが示された。過敏型は自分へ向けられた攻撃性に大きな影響を与えている。一方，無関心型は他者への攻撃性に相対的に影響を与えている，ということが明らかになった。これらは，無関心型自己愛が「誇大で，能動的，自己中心的」であり，他者に対して攻撃的になりやすいという特徴から，他者に対して攻撃性が向かいやすいとうことを実証的に示している。同時にまた，過敏型について，その攻撃性は主に自分に向けられているのだということを，実証的に示すことが出来たと考えられる。

Ⅳ　総合考察

1．攻撃性と自己愛傾向の関連について

今回，自己愛傾向に特徴的な傾向がそれぞれ攻撃性の特徴として示された。このことから，攻撃性は，それ自体が他者との関係性の中で意味を持つものであるが，他者との関係性を規定する他の要因の影響を大きく受ける，ということが示唆された。安立(2001)は攻撃性について，“攻撃性を扱う当人の意図の次元のみでなく，当人を取り巻く人間との関係性の次元まで拡げて”攻撃性を捉えていく視点が必要だと述べている。今回扱った自己愛傾向は，この周囲の人間との関係性の次元から攻撃性を捉える視点の一つを提供していると考えられる。

2．自己愛傾向と関連した攻撃性の持つ意味について

青年期という時期は，自己の同一性の確立という重要な発達的課題を達成する上で精神的に不安定な時期である。そして中山ら(2006)が述べているように，その達成には自己愛傾向が深く影響していると考えられる。まず無関心型自己愛傾向では，他者を攻撃したり非難・批判することで自分の意志を強く主張し認めさせようとしたり，自分という同一性を確立する手がかりとしたり，自分というものを確認する手段としているのではないかと推察される。過敏型自己愛傾向では，自分への攻撃性を用いることで注目を浴びたり，肯定的な評価を得たりして自己を防衛しようとする一方で，自己の確立や確認を行おうとしているのではないかと考えられる。渡辺(2000)は，攻撃性は自身へ向けられることで，様々な形態をとりながらも自分という存在を確認する手段となることを示唆している。角丸(2004)はまたそれに加え，攻撃性がその自分を他者へとアピールする手段となり得ることを示している。これらのことから，攻撃性は自己愛が関連することで，自己を確立し，確認する際の一つの手段としての意味を持つのではないかということが考えられる。

3．まとめ

本研究は，攻撃性には自他への方向性によって大きな相違点があり，“健全な自己愛”(小塩,1998)として無関心型，過敏型自己愛傾向それぞれが攻撃性の様相に影響を及ぼし，大きな特徴を与えているという事を示すことが出来た。このことから，攻撃性の他者との関係性における知見と攻撃性が持つ意味をはじめ，青年期における攻撃性の多層的理解と，また自己愛傾向への理解の一助となり，複雑な青年期の心理像の一端を捉え関わっていく上での足掛かりとしていく事ができるのではないかと考えられる。

4．今後の課題

本研究では，自他という方向性による攻撃性の様相の違いを自己愛傾向との関連から調査したが，自他に向かわない無罰という方向性も想定する必要があると思われる。3 つの方向性との関連，及び今回全体的な状態像の把握のため扱わなかった性差の検討を行うことで，本研究をより精緻なものへとしていくことが必要である。

謝辞

本稿の作成にあたり，お忙しい中丁寧なご指導を賜りました九州大学大学院人間環境学研究院教授の野島一彦先生，本稿の校閲や貴重な助言を下さいました同教授の大場信恵先生に厚く御礼申し上げます。

文献

安立奈歩 (2001)：攻撃性の諸相に関する研究　京都大学大学院教育学研究科紀要,**47**,475－485.

安立奈歩 (2003)：攻撃性に関する先行研究の概観　京都大学大学院教育学研究科紀要,**49**,442－454.

江崎真理 (2001)：中学生の攻撃性を引き起こすメカニズムに関する検討―ストレス対処と自己効力感の視点から―　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要,心理発達科学,**48**,378－379.

福井康之 (2001)：新しく出現したタイプを含む対人恐怖の質問紙調査による分類の試み　心理臨床学研究,**19**(5),477－488.

Gabbard G.O. (1989)：Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, **53**, 527－532.

Gabbard G.O. (1994)：Psychodynamic personality in clinical practice.：The DSM-Ⅳ edition. Washington, DC: American Psychiatric Press. 舘　哲郎(監訳)(1997)：精神力動的精神医学―その実践[DSM-Ⅳ版]　③臨床篇　Ⅱ軸障害　岩崎学術出版社.

秦　一士 (1998)：フラストレーション場面における敵意，怒り，言語反応の関係　日本教育心理学会総会発表論文集,**40**,151.

畑田直美 (2001)：高校生の攻撃性表出に関する一考察　臨床教育心理学研究,**27**(1),27－37.

角丸　歩 (2004)：大学生における自傷行為の臨床心理学的考察　臨床教育心理学研究,**30**(1),89－104.

景山任佐 (1999)：「空虚な自己」の時代　NHK ブックス.

松木邦裕 (1996)：対象関係論を学ぶ　クライン派精神分析入門　岩崎学術出版社

中川美保子 (2002)：青年期の攻撃性の促進や抑制に影響を及ぼす要因―自己愛や自尊感情との関係を

中心に―　日本教育心理学会総会発表論文集,44,633.
中山留美子・中山素之 (2006)：青年期における自己愛の構造と発達的変化の検討　教育心理学研究,54,188－198.
大淵憲一 (1993)：人を傷つける心：攻撃性の社会心理学　サイエンス社.
小塩真司 (1998a)：自己愛傾向の二側面に関する検討―3 つの自己愛尺度を用いて―　教育心理学論集,26,19-32.
小塩真司 (1998b)：青年期の自愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連　教育心理学研究,46,280－290.
小塩真司 (2002)：自己愛傾向によって青年を分類する試み―対人関係と適応,友人によるイメージ評定から見た特徴―　教育心理学研究,50,261－271.
小塩真司 (2004)：自己愛傾向と大学生活不安の関連　中部大学人文学部研究論集,12,67－78.
高橋美和子 (2006)：高校生における自己愛傾向と学校生活満足感の関連について―承認欲求からの影響についての検討―　カウンセリング研究,29,28－39.
高橋智子 (1998)：青年のナルシシズムに関する研究―ナルシシズムの 2 つの側面を測定する尺度の作成―　日本教育心理学会総会発表論文集,40,147.
占部慎一 (2002)：内化する攻撃性：自傷行為における攻撃性のメカニズム　京都光華女子大学研究紀要,40,65－91.
渡辺　亘 (2000)：抜毛症の心理療法における「閉ざされた攻撃性」と「開かれた攻撃性」　ある男児との遊戯療法から　心理臨床学研究,18(2),139－150.
山口　浩・吉田昭久・小熊　均 (1988)：日常生活場面に表出する人間の攻撃性―心理ダイナミズムとしての攻撃性の構造―　茨城大学教育学部紀要,37,85－106.
湯川進太郎 (2003)：青年期における自己愛と攻撃性―現実への不適応と虚構への没入をふまえて―　犯罪心理学研究,41(2),27－36.

本稿は，九州大学心理学研究第 9 巻(143-151,2008)に投稿したものを基に，査読により加筆修正をおこなったものである。

A study of relationship between aggression against oneself and others and narcissistic personality in adolescence

YAMASAKI, Syunsuke
Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

The purpose of this study was to make the differences between aggression against oneself and others in adolescence clear, and to examine their connections with the narcissistic personality tendency. In the first study, 45 university students completed a questionnaire to describe aggression freely in order to clarify the different aspects of aggression against oneself and others. In the second study, aggression questionnaire against oneself and others and Narcissistic Personality Inventory Short version (NPI-S) (Oshio, 1998a) were administered to 328 undergraduates to examine aggression against oneself and others and their connections with the narcissistic personality tendency in detail. The data were classified into four narcissist personality tendency groups according to the NPI-S score, and an analysis of variance was performed using aggression score as the dependent variable. As a result, the hypervigilant type narcissism had influences upon "self-reproach" and "stimulation desire" which were aggression against oneself. On the other hand, the oblivious type narcissism was shown to be influencing the " affirmative action", that was aggression towards others of being strongly self-assertive and indifferent to others. In other words, it may be said that aggression against oneself and others is related to the narcissistic personality tendency.

Key word: aggression to oneself and others, hypervigilant type narcissism, oblivious type narcissism